私小説

瀬戸内晴美

私小説

瀬戸内晴美

集英社

わたくししょうせつ
私小説

一九八五年　一月一二日　第一刷発行
一九八五年　三月三〇日　第三刷発行

著　者　瀬戸内晴美（せとうちはるみ）
発行者　堀内末男
発行所　株式会社　集英社
〒101　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話　出版部（〇三）二三八―二八四二
販売部（〇三）二三〇―六一七一
製作課（〇三）二三八―二九六四

印刷所　大日本印刷株式会社
定　価　九八〇円
©H. SETOUCHI, Printed in Japan, 1985
ISBN4-08-772497-2　C0093
著者との了解により検印を廃止いたします。
落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。

私小説

亡き姉に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

火葬場の火葬炉の口は、巨大な金庫のように二枚の岩乗な鉄扉で塞がれていた。二つの大きな乳鋲が物々しくついているので、いっそう金庫めいて見える。新築間がないとかで高い天井も壁も真新しさを匂わせ、床は黒大理石が敷きつめられ、顔が映るほど光っている。余分な飾りの一切ないせいか殺風景な箱のような感じのする広間に、師走の晴れた午後の陽の光りが入口側の硝子の壁から存分に射しこんでいた。

檜の柩は金属の車脚のついた台の上に乗せられている。出棺した新仏の自坊の座敷ではとりわけ大きく見えた柩がむやみに天井の高いここでは小ぢんまり見える。ハイヤー三台とマイクロバス一台で霊柩車を追ってきた喪服と僧衣の人々も、柩の廻りにばらりと散らばってしまうと、頼りないほど小人数に感じられた。

火葬炉の口は壁面に二つ並んでいて、奥の方の一つは今日は無用のようだった。

さっき石で釘を打った音がまだ耳に残っている柩に、人々がもう一度首をさしのべ合掌し、最

後の別れを惜しんでいた。置台の脚が高すぎるのか、柩が格別立派で深すぎるのか、年寄の女たちは爪先立ちにならなければ蓋の上部にあけられた小窓が覗けない。私は喪服の老女たちが柩にとりすがるようにのび上っている背後から、四角い小窓の中の新仏の死顔を背のびして拝み引き下った。際立って高い型のいい鼻筋を花々の間から覗かせた白蠟色に固った顔は、品のいい貴婦人のこぢんまり整った死顔のように美しく見えた。天台大僧正の位を極め、京都で最高の門跡寺の門主であられた男僧のいかめしさはなかった。元来小柄で色白の撫肩が柔かな方であった。普段の話し声も物静かで女性的だが、読経の声は凜々と張り、声明(しょうみょう)の節廻しは酔わせるように音楽的な響きがあった。天台宗の導師としては、座主(ざす)はさておき、当代最高の人との定評があった。

そういうことが私にもわかってきたのは、九年前に出家して読経や声明にもいく分かは馴れ、比叡山の行事や、同門の寺々との関わりがようやくのみこめてきて後のことであった。そしてその時、私はこの人を戒師として出家得度したことが如何に身分不相応な光栄であったかということに気付かされた。

それは全く偶然の出来事であった。本来私の得度の戒師を引き受けてくれていた小説家で中尊寺貫主だった香春(こうしゅん)暢(ちょう)大僧正が、得度式の一月ほど前から癌で入院され、手術するという突発事故が起きたため、急遽、香師が同門で誰よりも敬愛している松谷義真大僧正に代行して頂くという事態になった。すべては香師の計らいで行われ、私は事後の結果の報告を受けただけであった。松谷大僧正が当時東叡とも呼ばれる寛永寺の門主であられたことさえ、その頃の私にはよくのみこめていなかったのだ。

「あんたは幸せな人だよ。私が倒れたおかげで、私より偉い立派な方に戒師になっていただける

んだからな」

癌病院の病室のベッドで、香師が不慮の事態に口には出来ないが心細がっている私を励まし慰めるように、明るい口調でいわれたのだ。そして式の当日のいよいよのその時まで、私は戒師に逢ってさえいなかった。香師の意向で、その式は最高の様式を整えた式に則って行われたため、参列の僧侶たちの間では打合せのリハーサルがあったとか後で聞かされたが、得度者の私は感激が薄れるからということで、ぶっつけ本番で受けるようにと、松谷戒師からの伝言が届いていた。その配慮がどれほど有難いことであったかと理解出来たのも、ずっと後になってからであった。

式の当日、五十年も生きてきて大ていの事には上らなくなっている私も、頭の中が空白になるような極度の緊張があった。その緊張をいつのまにか解きほぐしてくれたのが戒師の涼しい口跡と、名人の宗匠の手前のように、経本や仏器に触れる至極自然な戒師の手のおだやかな動きであった。口うつしに誓いの言葉を称えている時は、私はすべてにすべての緊縛から解き放たれ、素直な子供っぽい声になっていた。

その時の香師の手術は成功したが、三年後には再発し遂に遷化(せんげ)された。法師を失った私は、かねがね香師の遺言もあって、松谷大僧正を二人めの法師に仰ぐことを許された。私が松谷師の弟子になってほどなく、松谷師は寛永寺から京都の妙法院門跡として移られた。得度以来、私は嵯峨野の曼荼羅山の片ほとりに庵を構えていたので、同じ古都に松谷師と棲む好運に恵まれた。それでいて、私は香師の時もそうであったが、身に過ぎた法師に対して最低の儀礼さえ事欠き勝ちに過し、非礼のままたちまち数年が過ぎてしまっていた。

「では、これでお別れを終らせていただきます」

黒い服に白手袋を嵌めた火葬場の用務員が挨拶すると、車のついた台のまま柩が音もたてず鉄扉の前へ運ばれていった。二人の用務員が左右から扉を恭しく開くと、中に更に鉄扉があって、愈々それは金庫めいて見えた。二枚目のその扉は電気仕掛とみえ、ゆるゆると下から自然に引き上げられて行く。扉の上って行く分だけ、深い焼却炉の暗闇の口が拡がっていった。「死口」という言葉がその闇の奥から浮かんできた。今、目の前に見せている奥深いその縦長の闇の口は、如何にも「死口」というイメージにふさわしい。しかし「死口」とはこの暗い穴をさす言葉ではなく、手術で子宮を喪った女の腹の空洞をさす言葉だと聞いている。それを私に教えてくれたのは、今年古稀を迎えた女流作家の恩地芙佐が、五十代に書いた短篇小説であった。子供を産む機能を喪った女の腹が「死口」なら、その臓器を持とうが失おうが、もはや生理の血を流さなくなった女のすべては、腹に昏い不気味な「死口」を抱いていることになるのではないか。場所柄にふさわしくない突然の連想にとまどっている私の前で、柩はゆるやかに穴の中に呑みこまれていく。

人間の生れてくるのを見たことがある。六月の強い陽ざしが中庭の樹々の青葉の間を通り、白金色にちかちか光りながら縁側から八畳の中程までさしこんでいた。二十四歳の妊婦の姉の下半身がむきだしにされ、縁側に近い畳に敷かれた蒲団の上に膝を立てて両脚が押し開かれていた。姉は人並より色が白かった。小柄できゃしゃな軀つきの割にテニスで鍛えたひきしまった筋肉は若さをみなぎらせ、艶々していた。艶やかなのは内股から脚の先までおおう汗のしめりのせいもあった。いきむ姉が苦しがり暑がるため、もう障子も縁側の硝子戸も開け放たれていた。木洩陽がまぶしいほど白い汗に濡れた姉の内股に斑を踊らせている。浴衣の胸も絶間ないあえぎと身悶

えであらわに開き、不気味なほど大きくふくらみきった乳房が青い静脈を地図の川のように走らせていた。そこも乳房の谷もしとどに汗が噴き、きらきらと光っていた。私は十九歳だった。父母がハルビンの叔母の葬式に出かけて留守の間の姉の出産だったので、一番近い肉親としてその場に立ち合わされていた。心臓の持病で遠い旅行の出来ない母方の一番若い叔母と私だけが身内で、他には近所の主婦が二人手伝いに来ていた。結婚はしているものの軀が弱くて子を産んだことのない若い叔母と、女子大にその春入ったばかりで性の経験もない私とは、ただもうその場の熱気をはらんだ雰囲気に圧倒されて、木偶の棒のようにそこに存在しているだけであった。

気の小さい叔母は、姉が苦痛のため呻いたり身悶えするのを見聞きするだけで、自分の方が早々と貧血を起し、隣の主婦に別室に連れだされてしまった。その頃その町ではお産は家に産婆を招いてするのが当然のような風習で、姉は最初の出産も、この家のその座敷で同じ産婆と母の手を借りて無事に終えていた。

「もうすぐじゃ、気ばって、がんばって」

「ひさちゃん、しっかりして、すぐでよ、ほら、すぐでよ」

姉は誰の声も耳に入らないらしく、いやいやをする子供のように濃い眉根を寄せ、どこよりも自慢の皓い美しい歯をぎちぎち噛みあわせ、歪み引きつった顔で、はあはあ喘いでいた。左右から近所の主婦に両腕を押さえつけられ、産婆に容赦なく膝頭を摑まれて思いきり股を開かされている姿はこの上ない屈辱的な拷問にあっているようで、痛々しく、姉の呻きも身悶えも噴きあげる汗も、すべてその責苦の痛みからしぼり出されているように見えた。二人姉妹の私は、物心ついた頃から姉と寝、いっしょに風呂に入っていた。姉の軀は姉の目の届かない背中のほくろまで

知りつくしているつもりでいた。それでも今、目の前にむきだしにされている姉の内股は未知の場所だった。

義兄を迎えるまでは自分の軀より見馴れていた姉の肉体が、私には、今初めて見るように気恥しいものとしてそこにあった。息苦しさに私は目をそらせ大きく肩で息をした。廊下にいつのまにか真新しい白木の盥が据えられ、中に湯がたっぷりと張られていた。陽炎のように湯気の立つ盥の中にも木洩陽がなだれこみ、その反射が座敷の天井にうらうらと踊っていた。

五人男の子を産んだ向いの自転車屋の主婦が、

「ほれっ、いきんでっ」

と自分も真赤になって声をかける合の手のように、隣の菓子問屋のおとなしい主婦が、タオルで一声毎に妊婦の汗を拭っていた。

「頭が見えたでよっ」

産婆の野太い声が一きわ大きくあがった。髪を男刈りにして、ズボンに男のような背広の上衣を着こんだこの産婆を、町の人は蔭で「男女(おとおんな)の産婆はん」と呼んでいた。七つ道具の入った黒い鞄を自転車の荷台にくくりつけて風を切って走る産婆の姿を見かける度、今日はどこに生れるんやろと人々は見送った。

姉の呻き声が高くなった。私は思わずそこを覗きこまずにはいられなかった。きゃしゃな軀つきからは想像も出来ないほど猛々しい濃い陰毛の先まで汗の粒が光っていた。その黒い茂みの中にさけたなまなましい肉の間から真黒な固りがはみ出そうとしていた。ぐっとこみあげる嘔吐のようなものを、私はあわてて掌を口にあてて呑みこんでいた。目の中に涙がたまった。姉が高い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

動物的な声をあげて上体をはね上げそうにするのを、自転車屋の主婦が片手で荒々しく押さえつけた。また少しはみ出してきた黒いものを産婆がす速く掌で掴み、両掌で引き出すようにした。私は恐怖で目を掩った。赤ん坊の泣き声に目を開いた時には、もう赤ん坊の肩が引き出されるところだった。ずぶりという感じで、全身があらわれ、産婆の手に血まみれの肉塊が捧げられていた。私は再びこみあげてきた嘔吐を押さえきれなくなって、部屋の外に駆けだした。赤ん坊が通った直後の姉の性器も、血にまみれ、今斬りさかれたばかりの傷口のようになまなましくあえいでいた。

ふいに波濤のうねりのような声がわきおこった。火葬炉の内扉が完全に降り切り、今、二人の用務員が乳鋲のある厚い外扉を閉めようとしていた。読経は集った寛永寺と比叡山の僧侶があげるのだから、それは力強くリズム感に満ち、大海原の波濤が堂々と打ち寄せ引きあげまた打ち寄せてくるような荘厳な響きを持っていた。厚い二重の鉄扉の奥で、今燃えさかる炎に焼かれている柩がその波の声のような響きの中に浮んでくる。数珠を揉みしだく音が読経の伴奏のようにしばらくつづいていた。柩が焼け落ち、中につめられた花々が炎に巻きあげられ、翼に火のついた無数の小鳥のように昏い洞の中に舞い上り火だるまの鳥のように乱舞する様が思い描かれた。読経の波が静まると、参葬者は二階の控え室に案内された。

二階は畳敷の日本間と洋風の応接間がつながっていて、ここにも陽がさんさんと射し込む大窓が南に開かれて明るかった。この建物の設計のすべてが、火葬場のイメージの鬱陶しく陰気なものを追放する意図で造られているようだった。テーブルにはビールやおつまみの皿も並んでいた。

「香先生の時もここでしたね」

隣に坐った顔だけは見覚えのある僧侶が話しかけた。
「ああ、やはりそうでしたか。さっきからそんな気もしていたのですけれど」
「この建物は新築ですが、向うに旧い方がそのまま残っています。香先生の時はそっちでしたよ。控え室もその前に庭をへだてて」
「ああ、思いだしました。そうでしたね。香先生の時は隣の釜で、五十代の女の人が焼かれていました。賑やかな方だから、焼場でも女の道連れがあって御機嫌だろうって、誰かいってましたね」
「そうそう、どこかの女実業家で、女社長さんでしたよ。お気の毒に、あなたはこれでお二人も法師に遷化されたわけですね」
「はい……よくよく業が深いのでしょう……でも、もう法の師匠はいただかないことにいたします」
「ふむ……しかしあれだけの師に二人もおつきになれたということは幸運というものですよ。御門主はあなたは格別に忙しいお方だから、病気のことは報せるなと気をお使いになっていられたと聞きましたよ」
「はい……御悪いことを全く存じませんで……申し訳ないことばかりでございます」
事実私は松谷門主が一年近く御不例だったことも、御遷化の前、二ヶ月の入院をされていたことも全く知らなかったのであった。
「いや、あなただけじゃない。御門主はああいうお方だから、ほとんどの方に堅く御病気をかくしておいでだったようです。われわれの間でも、ごく少数の者しか存じませんでね。いや、全く

つつましやかなお方で御立派ですなあ……東京へはいつおいでです」
「一昨日。おなくなりになった報せをいただきました時、私和歌山の新宮に行っておりましたので……そこから一度京都へもどってすぐ上京しましたから、夜の十時に東京駅につきました」
「それはそれは……」
言葉がとぎれたのをしおに、私は座を立って廊下へ出た。晴れた冬空にやや陽ざしが弱りはじめ、町の屋根が雑然と折れ重りながら遠く地平の涯までつづいている。上野からこの火葬場までの途上で見たごみごみした下町のまだ気分のこもらない歳末風景が、目の中によみがえってくる。そこも焼けた筈なのに、戦後の屋並もまた、大正時代の名残りのような時代遅れな町造りが、せまい道路の両側にうねうねとつづいていた。
東京駅から上野の森の中の師の自坊に直行した。正式の通夜は翌日で、今夜はごく近親の人々の通夜だとは聞いていたが、生前の非礼を思いおこすと、どうしても遷化されたその日のうちに御わびに駆けつけなければ気がすまなかった。
暗い森の静寂の中で、地理オンチの私は運転手に間違いばかり教え、さんざん迷った揚句ようやくたどりついた時は、もう十一時も近くなっていた。すっかり機嫌を悪くした運転手をなだめすかして待ってもらい、闇の中にそこだけ灯りの洩れている門を駆けぬけていくと、すぐ義順さんが出迎えてくれた。御門主と高い鼻筋が生きうつしの義順さんは、私の息子といっていい程の年齢で、私の得度式には教師という役目を務めてくれ、私の横につききりで、歩き方から礼のしかたまで、一々文字通り、手取り足取り教えてくれた縁の人であった。
未亡人はじめ数人の人々の中に迎えられ、私は遷化された師の顔の白布をとっていただいた。

まだ、温みの残っていそうな薄紅い頬の温和な美しい死顔であった。遺族の方々は、もう誰も平静で取り乱したり興奮したりした表情の跡もうかがえなかった。

「九月に京都でお逢いした時、とてもお元気そうだって帰ってひとしきり喜んでお噂していましたよ」

義順さんが御門主の二倍もありそうな背の高さで話してくれる。明るくて気さくなこの人とは年齢の関係もあって、私は気がおけず、何でもあけすけに話しあえる仲になっていた。

法規の上では兄弟子ということになるのだろう。

「本当はあの時、少しよくなったので京都へ行ったのですが、医者にはとめられていたのです。でも、最後だと本人が思っているのがわかっていたし、私共としても止めることが出来なくて」

私はこらえていた涙があふれだした。

そうとも知らずに、その頃、私は一年に一度の観音講座の講師として妙法院に行き、話の終った後で一年ぶりで御門主に逢い、二時間ばかりとりとめもないことを話しこんで、

「お顔色もおよろしくってお元気そうで……」

など、今から思えば間の抜けた挨拶をして帰って来たのであった。あの日、わざわざ玄関まで送って下さったのは、御門主のお心ではもう永の別れをつげて下さっていたのかと、今になって思い当る節々があった。

「いつもそそっかしくて、何も本当のことがわかっていなくて」

私は義順さんの前だから見せられる手放しの泣き顔で悔いをいいつづけていた。

常宿にしているホテルにたどりついた時は深夜になっていた。

宮城に面したこのホテルでは、私の名入りのスリッパをそなえつけてくれてあったり、特別に仕事用の電気スタンドをつけてくれたりするなじみになっていた。

普通のホテルより広い間取りが気に入り、それもツインと決めているのは、私がホテルの部屋で仕事をする上、客が多く、日によれば十二、三人もの人々に逢うはめになるからであった。

およそ飾りというもののない殺風景に近い部屋の片側に、机と箪笥と冷蔵庫が一列に並び、反対の側にベッドが二つ並んでいる。たいていの時、一つのベッドは荷物や本や資料のコピーや原稿で埋められてしまう。

壁はベージュのほとんど無地に近い壁布で貼られ、カーテンも同色の地味な色合で統一されている。日によって、六階であったり、八階であったり階数の違いはあっても、部屋のスタイルはいつでも同じであった。このホテルの部屋では、私はもう暗闇の中でも確実に用が足せるくらいになっていた。

荷物を運んでくれたボーイが出ていったとたん、私は窓ぎわに寄ってカーテンを開けた。闇の中にテールランプの赤い灯をつらねて、車がまだしんしんと走っていた。

目のすぐ下には宮城の内濠が水をたたえて、ホテルの消え残った窓の灯明りをうつしている。宮城前広場の常緑樹の多い広い森は、今は闇の中に融けこんでいっそう黒々と闇を深め静もっている。濠には白鳥が飼われているが、白鳥も今は番いどうしが互いの羽毛の中に首をさしいれ、白い毛毬のようにひとつに融けあって、夢を温めあっているのだろう。部屋の灯が洩れた中空に、いつのまにか目に捉え難いほどの細い雨が斜めに降っていた。

濠と森を挟んで広場を横切る道と、濠外のビル街の道路に車が往来する外、動いているものと

いってはなかった。消え残されたビルの灯は、この時間になると薄い一様の水色になってはかなげに並んでいる。

私はこの窓からの風景の四季を、一日のあらゆる時間の情景を、正確に思い描くことが出来る。左手に宮城の内濠の一角と、白い櫓が見える。濠端の柳の芽ぶくなおやかな姿も、枯れすがれうなだれた姿も知っている。目の前の濠の向うは松の植わった石垣が濠を囲い、その向うに噴水を持った花壇がある。花壇のベンチにはいつでも恋人たちが腰をかけ、その前をジョギングの人々が玩具の人形のように機械的に走っていく。花壇の向うに森がひろがり、その涯に日比谷の街衢が霞み、ビルが無数に背を競う。ビル街の左端に議事堂の三角屋根が見え、窓の正面には東京タワーが聳えている。

空の色と濠の色と広場の靄は、いつでも小林清親の版画を思わせた。

私は見馴れた、けれども決して一度も同じではないこの窓の外の風景を眺めるのが気にいっていた。防音装置が完全なこの部屋では、廊下からの音は聞えても窓外の物音はいっさい聞えない。飛行機で雲の外を飛んでいる時のような無音の世界が頭の中に沈む時、私は最も孤独になり、限りない安息にひたされる。浄土とは音のない世界ではないだろうか。いつの頃からか私はそう思っていた。

迦陵頻伽という美しい声の極楽の鳥の名を知らぬでもないし、笛や鼓や鉦を持った飛天女の絵を見てもいる。それでも尚、なぜか私には、あの世は音の消えはてた森閑としたほの明るさだけの漂った世界のような気がしてならない。人間の姿も動物や鳥や花々の姿も、形といってはなく、すべてが透明で、透明さの中にそれぞれの魂だけが生きている。魂は声を発しない。魂は互に感

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c